

第一部 特別講演

大陸、日本語として

リービ 英雄 氏

司会 藤井 省三（東京大学）

講演者のリービ英雄氏は、作家・日本文学研究者。1950年生まれ。プリンストン大学卒業。スタンフォード大学を経て、現在、法政大学国際文化学部教授。米国・台湾・香港・日本と幼少期より越境を繰り返した自身の体験に根ざした作品を発表。主な著書に『英訳万葉集』（プリンストン大学出版社、1981年、全米図書賞）、『星条旗の間こえない部屋』（講談社、1992年、野間文芸新人賞）、『天安門』（講談社、1996年）、『千々にくだけて』（講談社、2005年、大佛次郎賞）、『仮の水』（講談社、2008年、伊藤整文学賞）など。近年は中国に関するルポルタージュ的な作品も多く、『我的中国』（岩波書店、2004年）、『延安——革命聖地への旅』（岩波書店、2008年）、『大陸へ——アメリカと中国の現在を日本語で書く』（岩波書店、2012年）など、作家の視点から現在の中国を生々しく浮き彫りにする。例えば、『大陸へ』に記録された河南省の貧しい炭坑まちの姿。そこに暮らす人々のざわめきや息づかい、さらにはあたりをうつすらと蔽う闇の質量までもが読む者へと迫るかのようだ。紛れもなくここには「文学」の力がみなぎっている。本講演では、第二部のシンポジウムに先立って、作家の肉眼がとらえた^{なま}生の中国像を提示する。

第二部 シンポジウム

中国とはなにか——言葉と権力

金 文京（京都大学）

小島 毅（東京大学）

濱田 麻矢（神戸大学）

司会 浅見 洋二（大阪大学）

今日の世界において中国は強烈なまでの存在感を示しつつある。中国が世界史の中心にふたたび躍り出たと言ってもいいだろう。それに伴って、国家レベルから個人レベルに至るまで、同時代の中国が孕むさまざまな問題が重要かつ切実なものとなって我々の前に突きつけられている。

中国哲学・思想史、中国文学、中国語学などを専攻するわれわれ日本中国学会会員の多くは、書物・文献のなかに表象された中国を研究対象としている。かかる視点から同時代の、現実の中国を見ると、しばしば感じるのは「書物のなかの中国」と「現実の中国」とが示す微妙で複雑な、曰く言い難い関係性である。両者は一見すると遠く隔たっているかに見えるが、一方で時として意外なまでに近しい姿を見せる。いったい両者はどのように異なり、あるいは重なっているのか。また、そこからあらためて中国をとらえ返すときどのようなことが言えるのか。本シンポジウムでは四名のパネリストが、それぞれの研究分野の視点からふたつの中国像を比較・検討する。例えば、儒家の經典のなかに記された国家の規範、官僚文人の詩に表現された知識人と皇帝や民との関わり、戯曲・小説に描かれた庶民社会の諸相、あるいはまた近現代の文学に刻み込まれた国民国家の影、等々を手がかりにして。

ひとくちに「書物のなかの中国」と「現実の中国」と言っても、それぞれの中身は多様であり、したがってアプローチの仕方も多様でありうる。ここではあるひとつの問題視角を設定してみたい。すなわち「言葉と権力」。ここに言う「権力」とは、大小さまざまな権力を含む。皇帝や王の権力から、地域の有力者や家長の権力に至るまで。こうした実体を伴う権力のほかに、法や規範などより抽象的な権力も含めていいだろう。およそ人が社会生活を営むところ、つねに権力関係は生ずる。しかも権力は上から降りてくるだけではない。下からも、内からもやってくる。一方の「言葉」とは、皇帝や官僚が下す命令の言葉から、知識人や藝術家が操る高踏的・技巧的な言葉、さらには名も無き民が生活のなかで発する日常卑近な言葉に至るまで、やはりさまざまなものを含む。一般的に言葉は、多種多様な権力が織りなす社会的な関係性の網目のなかにあつて生み出され、交換され、伝承されてゆく。その過程で言葉は、権力に対して時には迎合し時には抵抗するなど、さまざまな関係を取り結ぶ。言葉それ自体が権力と化すことすらあるだろう。本シンポジウムは、かかる権力と言葉の関係性という問題に即して中国なるものの特質を明らかにしようとする試みる。

おそらくは討議を通して、安易な概括を許さぬ複雑で多面的な中国の姿が浮かびあがるであろう。善と悪、美と醜、公共と利己、ユートピアとディストピア、等々といった相反する要素がさまざまに錯綜して衝突・融合を繰り返すかのような。その多面体としての中国を、日本における中国学の問題としていかに受けとめてゆくべきなのか、われわれの中国学の未来を展望する場としたい。